

附属中学校と附属幼稚園の協働による ESD 活動の実践

－ 生徒会活動と ESD の学びをつなぐ試みを通して －

長友紀子

(奈良教育大学附属中学校)

鎌田大雅

(奈良教育大学附属幼稚園)

若森達也・福田真人・成田菜津美

(奈良教育大学附属中学校)

長谷川かおり・河合理沙・上路繭里

(奈良教育大学附属幼稚園)

中澤静男

(奈良教育大学 ESD・SDGs センター)

ESD Activities in Collaboration with the Affiliated Junior High School and Affiliated Kindergarten:
Through Attempts to Connect Student Council Activities and ESD Learning

Noriko NAGATOMO

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Taiga KAMADA

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

Tatsuya WAKAMORI, Masahito FUKUDA, Natsumi NARITA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Kaori HASEGAWA, Risa KAWAI, Mayuri KAMIJI

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

Shizuo NAKAZAWA

(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

要旨：本実践は、学校教育の場において、特別活動の中に ESD に関する学びの場を創生すること、附属中学校と附属幼稚園の協働的な活動をデザインすることを通して、異校種間の接続教育の可能性について考察することを目的とするものである。実践を通して、ESD の視点を特別活動に取り入れることによって生徒の主体性・協同性が引き出される可能性があることがわかった。異校種間の接続教育については、教員間の課題意識の共有が進んだことが成果としてあげられると共に、園児・生徒の交流については持続的な交流の仕組みを構築することが必要であることがわかった。

キーワード：持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development

特別活動 special activities

接続教育 connection between school stages

1. はじめに

奈良教育大学附属学校園は、幼小中全ての学校園がユネスコスクールに加盟しており、ESD を意識した学習活動を実践している。特に、奈良教育大学附属中学校(以下附属中学校と表記)では、総合的な学習の時間では「1・2年生合同奈良めぐり」協同学習を実施するなど、総合的な学習の時間、教科学習、特別活動を通して、教育課

程を ESD の価値観を軸に編成している。本実践では、奈良教育大学附属幼稚園(以下、附属幼稚園と表記)と附属中学校の教員による協働的な学習の場の形成を通して、附属中学校、附属幼稚園の両学校園における新たな学びの形の創造を試行することとした。

本論の執筆は、2.2 幼稚園の実践の部分で鎌田が担当し、その他を長友が担当した。

1. 1. 問題意識

附属幼稚園と附属中学校が協同研究に至ったのは、附属幼稚園から附属中学校まで連続して学ぶ子どもが一定数存在することが理由の一つである。異校種の接続については、平成 29 年の学習指導要領・幼稚園教育要領の改訂により、教育課程の編成に当たっては、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫することが示された。

奈良教育大学の附属学校園の接続教育については、ESD の理念のもと学習の場を形成していくという共通の目的はあるが、具体的な取り組みには至っていなかった。そこで、各校種の教員が共通の課題に取り組み意見を交流する意義は大きいと考えた。

また、附属中学校は特別活動、特に生徒会活動には ESD に関わる活動が少なく課題と感じていた。附属中学校の生徒会活動は専門部と呼ばれる委員会を中心に行い、生徒が主体となって活動することを目標としている。そこで、委員会の場に ESD 的な視点を持った活動を取り入れることで、課題解決の手立てとなるのではないかと考えた。附属幼稚園との連携を前提として、園児にも取り組みやすい自然物を対象とする活動とすることで、協同的に活動できると考えた。

1. 2. 先行研究

ESD の視点を特別活動に導入した事例としては、ジオパークを活動の場とする学校行事の実践をまとめ、地域との連携、教科との連携について考察した山本隆太ら (2017) の研究がある。的場正美 (2018) の研究は、附属中学校における ESD と特別活動の実践のこれまでを概観した内容である。そのほか、ESD と総合的な学習の時間や道徳、教科学習とを関連づけた研究は進められているが、特別活動に限った場合まだ事例は多くないことがわかった。

ESD と接続教育の双方の視点に関わる事例では、幼児の造形表現活動における小学校教育以降に繋がる自然環境教育についての山西 (2021) による研究や、幼稚園年長児を対象に、造形遊びの特色を生かしながら自然との触れ合いを取り入れた実践を行った富田ら (2020) の研究などがあった。

幼稚園から中学校までの接続を取り上げたものとしては、全ての公立の幼稚園等の子どもたちが、最終的に町に一つだけの中学校に入学するという地域の特徴をふまえて、小中一貫校の研究に幼稚園等を対象として加えた石井 (2020) の研究がある。この研究は、授業や学校行事等の特別活動の時間を使って行う教育プログラム「ハートフルプログラム」を取り上げ、特別活動の教育的意義について述べる内容となっている。また、幼児期からの造形行為を踏まえた中学校美術科の実践に関する垣見敏雄 (2006) による報告は、教科に関わる内容で

はあるが、幼稚園から中学校までの異年齢の子どもたちの活動の様子を見とる内容となっている。

最後に、各校種の教員に視点を当てた研究としては、幼稚園と小学校の教員を対象に、両教育機関における教員の保育観や授業観について検討した廣瀬聡弥ら (2011) の研究や、幼稚園と小学校の教員が同じ 5 歳児を見とった場合の能力の捉え方の特徴と教育実践の捉え方の違いに着目した池田ら (2021) の研究は、異校種の教員の教育観や子どもの見取り方の違いを明らかにしており、興味深い。

以上を見てきた結果、ESD の視点を特別活動に取り入れた事例の蓄積は多くないこと、異校種間の接続教育に関しては、教育課程が接続する幼小もしくは小中を対象としたものが多く、幼小中を含んだ研究はなされているものの、これからの実践が待たれる分野であることがわかった。

本実践では、特別活動の中の生徒会活動を対象とすることで、先行研究では明らかにされてこなかった場面の生徒の学びの姿を見出すこと、幼稚園と中学校という直接的な接続のない機関の教員が協同的な活動をデザインすることを通して課題意識を共有する意義について考察していきたいと考える。

2. 実践の概要

2. 1. 実践全体の流れ

本実践は、附属中学校、附属幼稚園それぞれ行った活動と、夏休みの校外活動で構成される。まず全体の流れを示し、附属幼稚園の活動、附属中学校の活動をそれぞれ報告する。

全体計画

実施時期	2022 年 6 月～ 11 月
活動場所	附属中学校・附属幼稚園
参加者	附属中学校 (環境委員会・整美部・美術部・裏山クラブ・ユネスコクラブ・他有志生徒) 附属幼稚園 (たいようぐみ (年長) 園児)
活動内容	6 月～ 11 月 コキア栽培と両学校園の生徒・園児交流 8 月 馬見丘陵公園コキア見学 9 月～ 10 月 コキア栽培と両学校園の生徒・園児交流 11 月 コキア収穫、ほうき制作 コキア栽培と両学校園の生徒・園児交流

2. 2. 幼稚園の実践

園児にとっての意義

コキアという共通の植物の栽培を通して附属中学校の生徒と関わることで、幼稚園外の人とつながる経験がで

きる。幼児の探究心や好奇心がより掻き立てられたり、意欲的に活動に取り組もうとする姿が育ったり、植物への興味関心がさらに高まると考えている。

活動の概要は表1に示した通りである。

表1

日付	活動名	内容
5月中旬	コキアとの出会い	担任より「コキアって知っているかな？」という問いかけをもとに想像を膨らませる。
5月中旬	附属中学校から届いたコキアの種	附属中学校から種とビデオメッセージが届く。
5月中旬	土づくりをしよう	夏野菜を植えた時の経験を生かして土をつくる。
5月25日	種を撒こう	中学生がビデオの中でしていたように、ポットに種を撒き、水やりをする。
6月2日	コキアの芽が出た	ポットに小さな芽が出ていることに気づき、クラスみんなで喜ぶ。
6月3日	中学生に絵本を書いて知らせよう	芽が出たことを中学生に知らせるために、自分たちで絵本を作りはじめる。(エピソード参照)
6月3日	定植をしよう	ポットで育てているコキアが大きくなり始めていることを受けて保育室前の畑に定植する。
8月	夏休みのコキアの様子は・・・?	担任が畑に水だまりを作る。休み中の園のコキアの様子に加えて、県内にある馬見丘陵公園のコキアを見に行き、その様子を動画配信する。
9月	コキアとの再会	1ヶ月半ぶりにコキアを見て、大きく育ったことを喜ぶ。(エピソード参照)
10月	色づきはじめるコキア	だんだんとコキアの真ん中あたりから赤く色づき始めたことに気づき始める。
11月	枯れたコキアはどうなるのかな?	コキアの種取りをグループに分かれて行う。

活動を通した園児の様子

【芽が出たことを絵本にして中学生に伝えよう】

毎朝、植えたコキアに水やりをする。ポットの土をさわると「今はお腹いっぱいだから水はいらない」と、友達同士で話をし、水をあげすぎないように気をつけて世話を続けていた。種を植えてから数日で芽が出る。水やりの時に、芽が出ていることに気づいた子どもが、登園してきていた友達や先生に知らせる。「中学生のお兄さんお姉さんにも知らせたい」となり、保育者が用意した写真(土づくりや種まきの様子など、子どもたちの活動の様子が写ったもの)を画用紙に貼って、文字を書いたり、絵を描いたり、色を塗ったりと自分で

きることをして活動に参加した。

【夏休みが終わってコキアと再会した子どもたち】

久しぶりに登園してきた子どもたちは、成長したコキアを見て「めっちゃおおきくなったな」「かおよりおおきい」など、口々に感じたことを話していた。子どもたちの中には、休み中に行った旅行先で見つけたコキアの写真を持ってきたり、馬見丘陵公園にコキアを見に行きた話をしたりする子どももいた。

子どもの変化と育ち

子どもたちが積極的に土づくりや水やりなどに取り組んだことで、コキアそのものへの興味が湧き、家庭においても関心を示し、さらに興味を持つ姿につながった。

今回の交流を通して、園児たちは、コキアをそれぞれの学校園で育てたことで、自分たちの育てているコキアの成長を発見するたびに、中学校のコキアに思いを馳せて、気に掛けたりして、その成長を共有したいという気持ちが生まれていった様子が伺えた。「他者を意識し、思いを寄せる力」「他者と気持ちを共有しようとする力」「植物に対して愛情と責任をもって関わろうとする力」が育ったと思われる。

2.3. 附属中学校の実践

生徒にとっての意義

生徒会活動の中で植物を栽培する経験を通して、異なる他者と協働する場面が生まれ、生徒と園児という年齢の異なる集団が協同的に学ぶ機会、つまり、「多様な他者」とともに学ぶ機会を得ることができる。特別活動の中に ESD の学びを取り入れることで、生徒がより多くの場面で経験的な学びを積み重ね、主体的・協同的に学ぶ力をつけることができると考える。

活動の概要は表3に示した通りである。

表3

日付	活動名	内容
5月中旬	コキア種植え	コキアの育て方を調べ、種を植える。動画を撮影し、附属幼稚園の園児が種植えをするときの参考となるようにビデオメッセージを作成する
6月～7月	コキアの世話	幼稚園の園児から、コキアの絵本を受け取る。定例委員会で鑑賞し、園児に対して絵手紙を作成し、幼稚園に送る。
8月	馬見丘陵公園コキア見学	有志で馬見丘陵公園のコキアを見学する。見学后感想・学びを google ドキュメントにまとめる。
9月	コキアの世話	長期休暇の間にコキアが枯れてしまう結果になった。育て方について反省点を記録する。

10月	幼稚園のコキアの様子を聞く 後期の専門部開始	幼稚園のコキアが色づき始めた と報告を受ける。 後期生徒会専門部が開始となり、 メンバーが入れ替わる。 環境委員会と整美部が統合し、 環境整美部となる
11月	枯れたコキアを収穫し、 ほうきを作る	代表生徒が幼稚園の枯れたコキア を収穫させていただく。 コキアでほうきを制作する。 附属中学校分は稲藁で藁ほうきを 制作する。

活動を通じた生徒の様子

附属中学校の委員会活動は、前期（4月～9月）と後期（10月～3月）の二期制となっている。活動には主に前期の生徒が関わったが、ほうき制作を行ったのは後期の生徒である。委員会活動を中心に実施したが、実際の活動場面では、委員の中でも興味がある生徒が自主的に参加する形をとった。そのため、委員以外からも他の部活動の生徒や有志の生徒が関わり、参加した生徒の構成が緩やかに変動する中で活動を行った。

コキア栽培に関して、当初は教師からの提案であったため、生徒は委員会の活動だからやってみる、という姿勢であった。コキアの種植えは、裏山クラブの生徒が中心になって行い、撮影した動画を委員会の有志の生徒がビデオメッセージに編集した。このビデオメッセージの編集の時期から、活動に興味を持って自ら参加しようという生徒が現れ始めた。コキアの種のポットの水がなくなると水やりを自発的にする生徒が出てきて、コキアを意識している様子が見られた。

幼稚園から園児の絵本が届き、定例委員会で鑑賞すると、園児が楽しんでコキア栽培している様子を感じ、一緒に活動をしている実感が深まった様子だった。絵手紙は整美部の生徒が描いたが、カラフルな絵とともに、園児が読みやすいように工夫するなど、相手を思って活動ができた。

夏休みの8月に、馬見丘陵公園のコキア見学を実施した。附属中学校生徒4名、附属中学校教員1名、附属幼稚園教員2名が参加した。参加生徒の内訳は、環境委員会所属3名、美術部所属1名であった。馬見丘陵公園訪問は、コキアが成長した姿を実際に見るとともに、地域の中でもコキアをはじめとして植物が大切に育てられている様子を見てもらいたいと考えた活動であった。参加生徒のうち3名が附属幼稚園の卒園生であったこともあり、幼稚園教員が園児の成長した姿を見るなど、今後の学校園接続のために良い効果が得られたと思う。

9月に入り2学期が始まったが、附属中学校のコキアは世話の仕方に課題がありうまく育てることができなかった。10月には、附属幼稚園のコキアが色づいた。11月に入り、代表生徒2名が実際に幼稚園を訪れ、コキア1株を収穫した。コキアは附属中学校に持ち帰り、

ほうきづくりを行うことにしたが、1株分のコキアで作ったほうきは幼稚園に贈るため、附属中学校の分のほうきはプロジェクトに関わる附属中学校教員が自宅から稲藁を持ってきて藁ほうきを作ることにした。ほうき作りは後期の委員会の生徒が担当した。

生徒の変化と育ち

4月当初の生徒は、コキアそのものを知らなかったり、これまでの委員会にない活動内容であったりしたことから、興味よりも義務感で参加している様子が多く見られた。生徒に変化を感じたのは、コキアの種植え動画を作成した時期である。種植えの様子をビデオメッセージにして幼稚園に送りたいと知らせると、編集をしたいと生徒から希望が出てきた。担当した生徒らは、園児にわかりやすいように簡単に短い内容に字幕をつけるなど熱心に作業を行っていた。また、種を植えたポットの水がなくなっていることを発見すると、「水がないので水をやっていいですか」と聞きにくる生徒も出てきた。

前期の生徒は、園児とのメッセージの交流を通して意識を変化させていった。委員会の仕事という認識は最後まであったと思われるが、園児からの絵本を見て返事の絵手紙を描いた活動では、自分の手紙を受け取る園児のことを考えて読みやすいように工夫したりカラフルに色を塗ったりしていた。生徒と園児は、年齢の差も大きく共通の話題を持つことがあまりないと思われるが、コキアを通して生徒は園児を思い、園児は生徒を思うという双方向のコミュニケーションが生まれていた。幼稚園の活動の園児の変化の記述にあったように、「他者を意識し、思いを寄せる力」「他者と気持ちを共有しようとする力」が生徒の中にも育ったのではないかと思う。

ほうき制作は、後期の生徒にとって初めてコキアに関わる機会となった。コキアや稲藁でほうきを作る作業は、中学生にとっても難しく、同じ学級の生徒と協力しながら稲を束ねたり、ほうきの形を整えたりしていたが、このような協同的な作業は生徒同士の自然なコミュニケーションを生みやすくするとわかった。

作業後に生徒に感想を尋ねると、「最初は面倒くさいと思っていたけど、友だちと一緒にやるのが楽しかった」と答えていた。ほうき制作を通して、他者と関わる楽しさを感じることができたのではないだろうか。

3. 成果と課題

3.1. 成果と課題

本実践は、現在コキアでほうきを作成した段階で、最終的に幼稚園にほうきを渡し交流を終える予定である。

本実践の目的は、学校教育の場において、特別活動の中にESDに関する学びの場を創生すること、附属中学校と附属幼稚園の協同的な活動をデザインすることを通して、異校種間の接続教育の可能性について考察する

ことであった。生徒会の委員会活動の中にコキアの育成とほうきづくりを取り入れたことは、園児や生徒にとって新しい学びの場作ることに繋がったと感じている。

園児たちが、「今はお腹いっぱいだから水はいらない」と、友達同士で話をしたり、芽が出ていることを「中学生のお兄さんお姉さんにも知らせたい」と思ったりしたことは、今回の活動を通して園児の中にコミュニケーションの力や何かを主体的にやりたいと思う気持ちが育ったことの表れであると思われる。生徒にとっては、委員会活動の中でコキアについて知ったり、園児と交流したりするなど、これまで総合学習や教科で行ってきたものとは違ったアプローチで ESD について考えることができた。

活動が進むにつれて、自分から興味を持って関わる生徒が増えていったことも、今回の成果と捉えたい。本実践は、附属中学校においては基本的に委員会活動として位置付けたため、委員は全員が参加するというのが前提ではあったが、活動の実際の場面では、やりたいと思う生徒が自由に参加するような緩やかな方法をとった。これは、今回のような特別活動の場面に ESD 的な視点を取り入れた場合、生徒の自主性がどのように現れるかを見取りたいと考えたからである。少しずつ興味を持って参加する生徒が増えたこと、参加する中で自分なりのやりたいことを見つけたり、ほうきづくりを通してコミュニケーションを深めたりした生徒が出てきたことなどから、特別活動の中に ESD に関する学びの場を創出した意義が見出せたと思う。

異校種間の接続教育の可能性については、幼稚園と中学校の教員同士が園児や生徒の姿を共有できたことの意味が大きかった。今回は、中学校教員は生徒の、幼稚園教員は園児の姿を、教員同士の情報交換で共有した形であったが、今後は先行事例にもあったように、同じ生徒、園児を双方の教員で見とることで、今後の実践に生かす考察ができればと考える。

課題は、附属中学校においては委員会活動の指導に十分な時間が取れなかった点である。コキアの成長がうまくいかなかったことも、教員の時間的な余裕のなさが関係したと感じている。学校園同士の連携では、生徒が実際に関われる場面が少なく、教員間のやりとりが中心となったため、協同的な学びの姿を深めるためにはオンラインを活用した情報交換など、さらに工夫が必要であると思われる。

3.2. 今後の展望

最後に、今後の展望であるが、コキアの栽培は、学校園で協力して来年度も継続して行う予定である。特別活動の中に ESD の視点を取り入れたことで創出した学びは、生徒や園児の自主性を自然に引き出すことができる学びの形となった。今回の課題をふまえ、特別活動の場から広がる学校園の接続教育の形を模索していきたいと思う。

参考文献

- 文部科学省 (2017), 小学校指導要領, p21, https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf (2022.11.20 確認)
- の場正美 (2018), 「奈良教育大学附属中学校の ESD と特別活動」, 東海学園大学研究紀要, 第 4 号, pp. 79-95
- 山西多加 (2021), 「造形表現活動を通じた幼児の自然環境教育」, 教材学研究, 第 32 巻, pp. 25-32
- 富田晃, 久保琴枝 (2020), 「幼小接続期における自然との触れ合いと表現の芽生え—幼稚園年長児に対する植物仮装の実践から—」, 弘前大学教育学部研究紀要, 第 24 号, pp. 25-32
- 山本隆太, 松尾由希子 (2017), 「特別活動における自然体験活動に関する考察—ジオパークを活用した地域連携, 教科横断的な学習に向けて—」, 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 第 28 巻, pp. 1-8
- 石井ちかり (2020), 「校種を超えた特別活動(園・小・中学校)」, 日本特別活動学会紀要, 第 65 巻, pp. 467-475
- 垣見敏雄 (2006), 「活動主題を軸にした造形表現の学習についての一考察—幼児期からの造形行為の継続をふまえた中学校美術の実践」, 美術教育, No.289, pp. 122-123
- 廣瀬聡弥, 山田芳明, (2011), 「幼稚園と小学校の教師が持つ保育・授業観とその形成—幼小接続のための相互理解に向けて—」, 美作大学・美作大学短期大学部紀要, 第 56 巻, pp. 23-33
- 石井明子, 上田紋佳, 柏原真由美, 中山美充子 (2021), 「遊びにおける幼児の能力の見取りが教育実践の捉え方に与える影響—幼稚園教師と小学校教師による幼小接続期 5 歳児の見取りに着目して—」, 就実教育実践研究, 第 14 巻, pp. 43-58

